

2022年度
修士学位請求論文要旨

社会的脆弱な立場の女性たちの
情動性の変化とそのプロセス
—ジブチ共和国における海外ボランティアの活動を
事例として—

国際日本学研究科 国際日本学専攻
多文化共生・異文化間教育研究領域
4911213003 大谷 温理

本研究では、国際教育開発の現場において、海外ボランティアの場への参画は、社会的脆弱な立場にある人々の情動的な発達にどのように関連しうるのか、またそれは何故かかについて、筆者が関わったジブチ共和国（以下：ジブチ）の事例をもとに考察した。筆者は国際教育開発の現場に身を置く中で、日本人である「私」がジブチという他国の人や組織に関わり、「私」にとって良いとする活動を行うことが果たしてその人たちの「ため」、現地の「ため」だと言えるのだろうかという疑問を持っていた。そんな中、筆者は、ジブチの女性たちと共に裁縫活動を始めた。この活動を通して、共に活動した女性たちが大きく変化していくのを見た。この変化は何か、なぜ起きたのか、彼らにとって海外ボランティアである筆者はどのような存在だったのか、筆者によって彼女たちの生活や学びの空間にどのような変化が生まれたのか、という問いを持つようになった。以上のことが、本研究における中心的な問いである。

第一章では、筆者の実践者としての国際教育開発での2年間の取り組みを回顧的に振り返りながら、国際教育開発へのアプローチの変化と「支援するーされる」の関係、途上国における女性の情動性の固定化の問題、国際教育開発における海外ボランティアの参画、外部支援者の現場へのアプローチの4つの観点から先行研究を整理した。そして、筆者は海外ボランティアの場への参画は、社会的脆弱な立場にある人々の情動的な発達にどのような変化を生み出すのかという問いを立てた。

第二章では、本研究の目的と意義について述べ、その目的を達成するために設定した2つの研究の問いについて詳述した。本研究では、海外ボランティアの現場に関わることによって生まれた場の変化を、社会的脆弱な立場に置かれた女性たちの情動性の変化とその契機を手がかりとして明らかにした。具体的には、関連する団体のNGOに通う女性たちが「諦めの状態」から「自ら活動を生み出す」ようになっていく情動性の変化をとらえ、その契機を明らかにした。次に、それらの女性たちの変化を、場と関連させて捉えるために、活動理論を枠組みとして分析を行った。本研究の学術的な意義は、人の学習・発達を場の変化と関連させて捉えることである。社会的脆弱な立場に置かれた女性たちが情動的に発達していく姿を捉えるだけでなく、それを支える場はどのようなものであったのかについて考察した。実践的な意義は、海外協力隊など異文化からの他者が、現場へ参画することで、現場にどのような変化をもたらすのかの一事例を示すことで、「支援するーされる」の関係を再構築し、共創するアプローチの事例を示すことである。

第三章では、研究の方法について詳述した。研究協力者は、筆者が二年間勤務していたジブチにあるNGOの裁縫クラスに参加した女性生徒4名である。筆者は、彼らの協力を得てライフストーリーインタビューを実施した。加えて、彼女たちの変化について明らかにするため、裁縫クラスの活動の様子を観察し、生徒の変化を近くで見ていたNGOのディレクターやNGOのローカルスタッフ、そして共に活動を行った1名のJICA海外協力隊からも情報を収集した。また、筆者による裁縫クラスの参与観察（2018年-2020年）および現地での

の追加調査（2022年6月）もデータとして用いた。分析データは、女性たちの変化を場と関連させて捉えるために、活動理論を理論的枠組みとして分析を進めた。

第四章では、社会的脆弱な立場である女性たちが、裁縫クラスに参加する中で、どのような経験をし、どのように活動が進められていったかについて具体的に記述した。本研究では、筆者が2018-2020年の2年間JICA海外協力隊として勤務した、ジブチの郊外にあるスラム地区が多く立ち並ぶバルバラ地区のNGOチャイルドでの取り組みを実践事例とした。具体的には、女性生徒の自立支援を目的として開始された裁縫クラスである。

第五章では、本研究の問いに対する分析と考察を行った。分析は次の2段階で行なった。まず、1名のカルトゥー（生徒A）のインタビューデータの分析結果を考察し、その後、他の研究協力者3名と比較検討し、情動性の変化とその契機の共通点を明らかにした。1名のカルトゥー（生徒A）のライフストーリーインタビューの分析からわかったことは、「主体的にNGOに自分達のやりたいことを提案し、仲間を集め、企画ができるようになる」までを情動的な発達のプロセスとして捉え具体的に示した。1名のデータから見えることは、生徒AがNGOの環境と相互に作用しながら自らのやりたいことをどのように見つけていったのかということである。自分の置かれている現状に対して諦めの状態であった生徒Aは、そういった状況を変えたいと思い、NGOにやってきた。彼女が情動的に変化したきっかけは、新しい関係性、新しい道具、新しい役割、新しい場との出会いであった。具体的に、諦めの状態にいた生徒Aが新たな活動を自ら生成するようになったプロセスとして（1）今までとは異なる経験ができる活動との出会い（2）自分の「やりたい」「やってみたい」を話せる場（3）販売会に参加することで気づく自身の可能性（4）リーダーとして演じる経験（5）裁縫クラスを通して変化した生徒Aの家庭内での見え方（6）これまでに行きことがなかった場へのアクセス（7）新たな動機を生み出す道具（8）生徒A自らディレクターへやりたいことが言える場（9）自分の未来を切り拓いていくことができる場の9つのプロセスが明らかになった。

次に生徒Aを含む他の研究協力者3名のデータを比較検討した結果、情動性の変化とその契機の共通点として次の7点が明らかになった。それは、（1）諦めの状態（2）職業訓練を受けても次のステップに続かない不安（3）新しい場へのアクセスが可能になる（4）裁縫技術・知識が向上したことへの歓喜（5）自分たちで問題解決に取り組む（6）道具を媒介し生まれる動機（7）性別職業分離からの脱却である。この分析結果から、情動性の変化とその契機のうち海外ボランティアの場への参画と関連していたものは（3）（4）（5）（6）（7）であり、新しい関係性の構築、新しい活動の創出、新しい場へのアクセスが起点となっていることがわかった。

第六章では、第五章の結果の分析を場の変化と関連づけて考察するため女性たちの情動性の変化のきっかけとなった新しい関係性の構築、新しい活動の創出、新しい場へのアクセスがどのように場と関連しながら起こったかを活動システムを枠組みとして考察した。

第七章では、本研究の統括と、研究上の課題について述べた。本研究における課題は、二

点ある。一つ目は、海外ボランティアの立場では、女性たちの生活面や心の内面における社会的脆弱性にアクセスすることが難しかった点である。本研究では、女性たちのインタビューや NGO での参与観察を基に研究を進めたが、彼女たちの日常生活にアクセスすることが容易ではなかったため、その部分を考察に含めることの難しさを感じた。二つ目は、分析を進める上で、「外国人と活動することに対する葛藤・緊張」についてデータが一部挙がってきたが、それを仮説・検討する上では十分なデータがなかったため、今後この点についても検討していく必要がある。